山上の歌一首

一七一六番

白波の　浜松の木の　手向くさ　幾世までにか
年は経ぬらむ

春日の歌一首

一七一七番

三川の　淵瀬も落ちず　小網さすに　衣手濡れぬ
干す児はなしに

高市の歌一首

一七一八番

率ひて　漕ぎ去にし舟は　高島の　阿渡の湊に
泊てにけむかも

春日蔵の歌一首

一七一九番

照る月を　雲な隠しそ　島陰に　我が舟泊てむ
泊まり知らずも